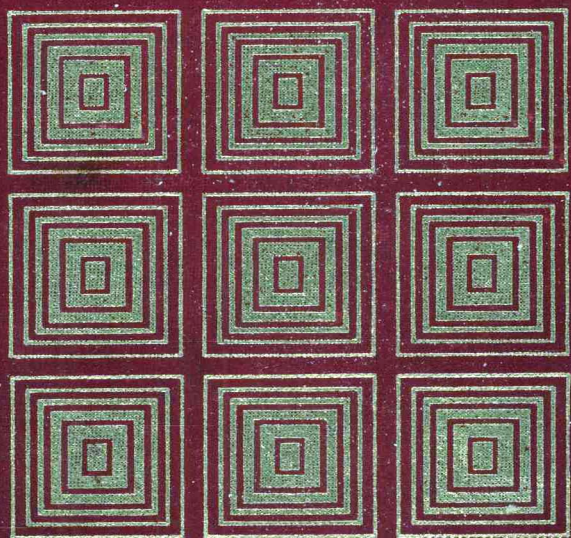
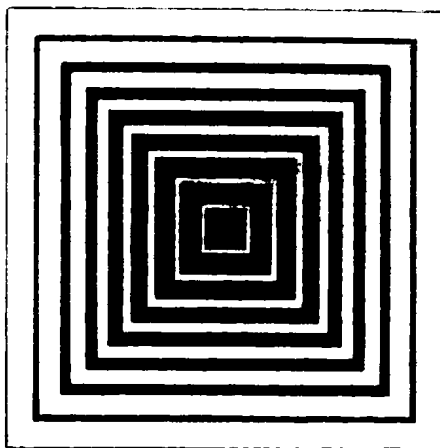




万葉集

折口信夫訳



日本の古典—2

河出書房新社

日本の古典 2

万葉集

昭和四十六年四月十五日 初版発行

昭和四十八年十一月十二日 再版発行

訳者 折口信大

装幀者 亀倉雄策

発行者 中島隆之

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地

電話 東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇・二

印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

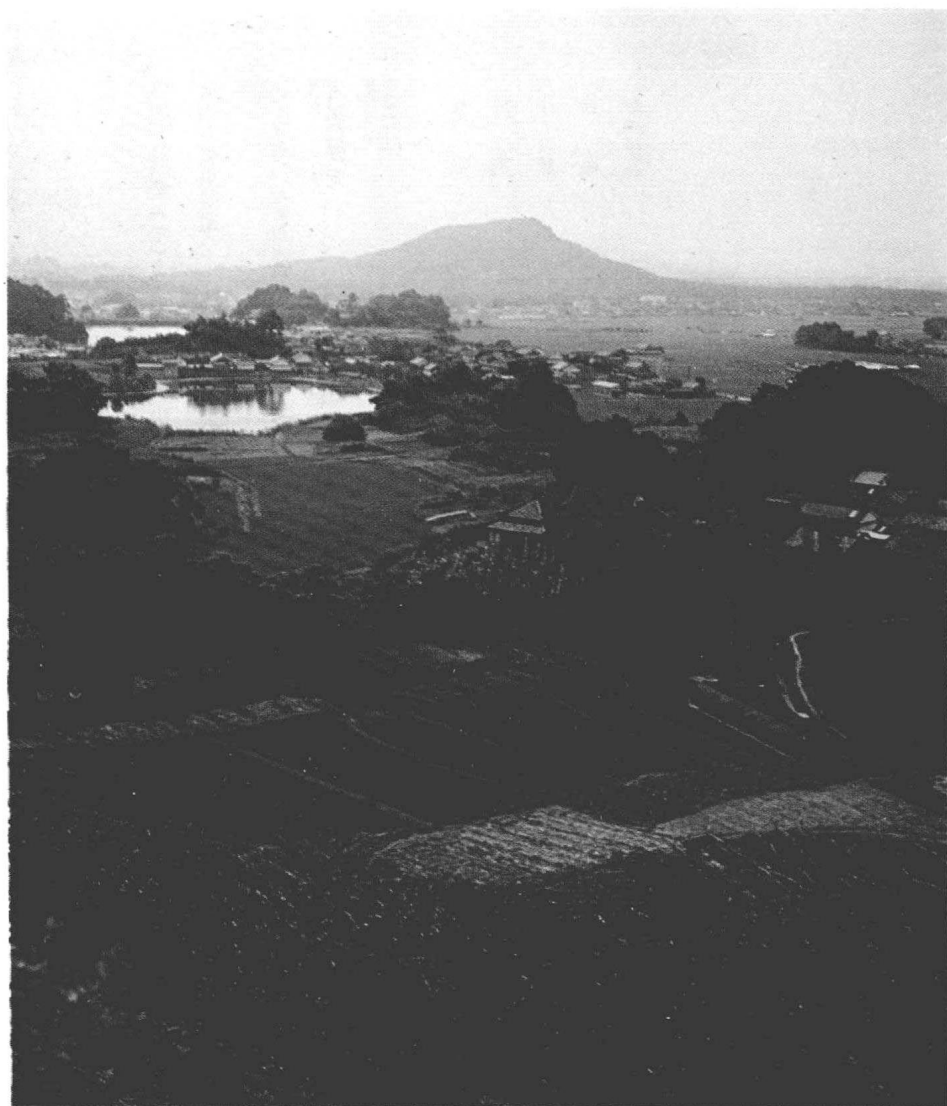
製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本川製紙株式会社

クロス 日本クロス工業株式会社

定価はカバー・帯にあります

©1973



あまかしのおか うねびやま
甘樫岡より畝傍山を望む（奈良県樫原市）

目次 万葉集

口訳万葉集（全）……折口信夫訳 一七

口訳万葉集補遺……岡野弘彦訳 四九

〈作品鑑賞のための古典〉

契沖

万葉代匠記……中西 進訳 四九

賀茂真淵

万葉考……中西 進訳 五二

解説 山本健吉 三

解説 中西 進 五二

注釈 岡野弘彦 五三

挿画 上村松篁

解説写真 榑原和夫

万葉集の成立と部立て

一

万葉集は日本最古の歌集である。万葉集の歌よりも古い歌としては、記紀に収められた歌があるが、一部の集をなしているものとしては、万葉集が一番古い。だが、それが何時誰の手によってどのように編纂されたかについては、定説がない。と言っても、大体を推測出来ないわけではない。九世紀の初頭、平城天皇の時代であったと思われる。

万葉集に収められた歌は、百数十年にわたる時代を含んでいる。そしてそこには、神話、伝説の色彩の濃厚な、神の薄明の時代から、大伴家持に代表されるような、近代の孤愁の詩にまで達する、日本人の実に豊かな詩の経験が圧縮されている。

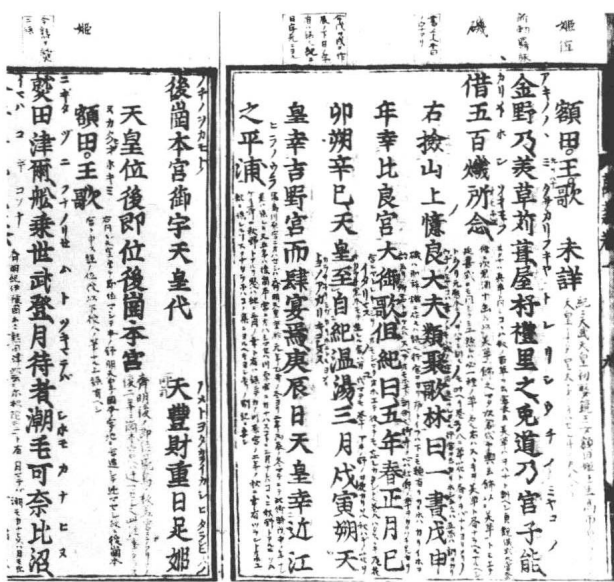
〔上限は舒明天皇の時代（三九一—四一三）である。もっともそれより古い磐姫皇后、木梨輕太子、雄略天皇、聖德太子などの作がないわけではない。だがそれは、それら貴人の名に仮託された伝承歌である。下限は淳仁天皇の天平宝字三年（七五九）正月一日、家持が因幡国庁で作る一首である。家持はその後、桓武天皇の延暦四年（七六五）まで二十六年間も生きるが、歌の記録としては、天平宝字三年で終止符を打

っている。そしてそれは、作歌年月の明瞭な万葉集の歌の最後である。もっとも巻十あたりの無名歌に、それ以後の歌がないという保証はない。だが大体において、八世紀なかばで万葉集の歌は終っていると見て差支えない。

二

万葉集という名前は、どういう意味が籠められていたのか。

平安朝には万葉集のことを、古万葉集と言っている。これは古い集だから尊んで「古」と言ったのだと、単純には



言えないようだ。新撰万葉集、あるいは統万葉集などという名前が残っているが、外にも万葉を名乗る集があつて、それらに対して古万葉集と言つたのであらう。

平安朝末に、顕昭と俊成とが、万葉の意味について言い争つたことがある。顕昭はよろずの言の葉の意味だと言ひ、俊成はよろず代の意味だと言つた。万代まで伝わるべき書物という意味である。

この二つの説の当否は、今に到るまで學者たちによつて争われている。俊成は自分が撰んだ勅撰集を千載集と名づけたが、この千載も千年の意味であり、千載万葉と対句をなしている。

平安中期に公任の倭漢朗詠集があり、それは少し前に出た源為憲の千載佳句の影響を受けて成つたと思われる。千載佳句は朗詠（漢詩の対句）を集めたもので、これは千年も伝わるという意味でなく、千年を祝福するめでたい対句の集ということである。その集の前型として、道真の撰という新撰万葉集があり、それも朗詠の集、すなわち千年を祝福する佳句の集という意味で、万葉と呼ばれているのである。

そのあといくばくも時を隔てないで、貫之等が醍醐天皇の勅による和歌の撰集、統万葉集を奉つた。これは翌年撰び直して、古今和歌集と名づけられた。古今集は朗詠の集ではないが、やはり万葉と名づけられる理由をそのうちに持っていた。

三

新撰万葉集と古今集とは、季節の推移に興を寄せている点で、共通した特徴がある。さらに万葉集に遡ると、巻八と巻十だが、四季雑歌と四季相聞とに分類されている。こ

れは古今集で、四季の歌と恋の歌とを重んじていることに照応する。

巻八、十の歌を見ると、四季雑歌とは宴会の歌である。それは宮廷や皇族・貴族たちの家々で催された宴会、ならびに旅をしたおりの行くさきさきでの宴会に、囁目した風景を取りこみながら即興的に作つた歌なのである。その宴会に列した賓客たちは、主の家の周囲に囁目する風景への讃め歌を作ること、家の建物ならびに家主の健康や幸福を祝福するのである。その讃め言葉に感染して、家主が齢を延べると考えた。万葉とは家主の齢の万葉ならんことを祝福する詞章なのである。それが万葉集や統万葉集では和歌を含み、新撰万葉集では和歌と詩句とを含んでいた。そして万葉集は宮廷の書物だから、結局は天皇の万葉を祝福



雄略天皇の泊瀬朝倉宮が営まれた辺り。奈良県桜井市黒崎（もと朝倉村）。
「龍もよ、み龍持ち、
桐串もよ、み桐串持ち、
この岡に葉つます子。
家宜らへ。……」（雄略天皇・一番）。



する詞章を集めたものだということになる。

平安時代初期、万葉集が編纂されたと思われる平城天皇の時代に、人びとが持っていた万葉の言葉の意味を一番はつきり担っていたのは、巻八と巻十であったと思われる。それを四季に分けたのは、四季それぞれの肆宴や雅会の際に作られたものだからである。その際、主上や家長の齢の讃美を、囑目の風景に寄せて陳べることから、四季雑歌が出来、それがただ朗かで祝言の気分を外れなければよいことから、叙景詩に転じて行った。さらにその肆宴が崩れてうたげとなると、舞姫たち列座の女とかけあい歌が交わされ、それは相聞発想を伴なってくるから、四季相聞となる。相聞とは言え季節の景物を詠みこんだ歌だから、「正述心緒」の歌ではなく、「寄物陳思」の歌である。

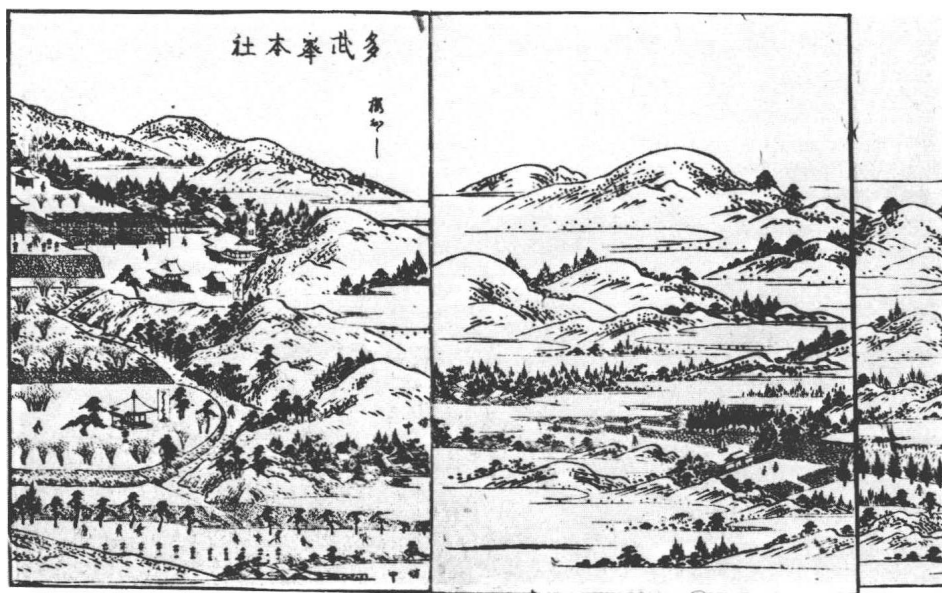
巻八の歌は、作者の名と作られた背景とが明かな歌を集め、巻十の歌は、作者の名を逸したものながら、いろいろの機会にうたい棄

てられた宴歌を集めた。この二巻の歌に典型的に見られるような、四季の風物と感懐とを陳べた歌集を、平城天皇から宇多・醍醐に至るころまでは、万葉集という名で呼んだものらしい。古今集がもと続万葉集と言



大和三山のうち、右が香具山、左後方が耳梨山。
「香具山は歌舞男々しと、耳梨と相諍ひき。神代よりかくなるらし。古も然なれこそ、うつせみも、妻を争ふらしき」(天智天皇・一三番)。

甘樫岡の附近を流れる飛鳥川。大和の万葉人たちは、この川筋を中心に住んでいた。
「飛鳥川。瀬々に玉藻は生ひたれど、柵あれば、靡きあはなくに」(一三八〇番)。



ったのは、ただ今われわれに知られている二十巻の万葉集のうち、巻八と巻十が当時理解された古万葉集であったから、それを継ぐという意識があったのではないかと思われるのである。

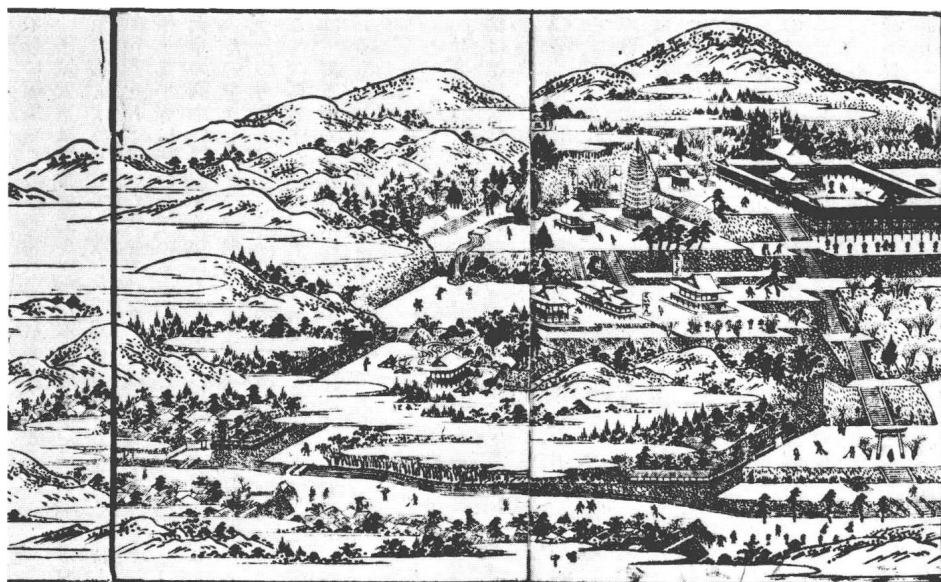
四

万葉集が何時誰の手によって出来上ったかについては定説はなく、編者については橘諸兄・大伴家持・藤原真楯（八束）・藤原浜成等の名が古来挙げられている。ことに、家持が手がけた巻はもつとも多いことが明かだから、契沖以来家持説を取る人も多い。

だが、古今集の編者たちは、平城天皇の欽定説を取っていた。平城天皇は平安時代にはいって二代目の天皇である。古今集の真名序（紀淑望）に言う。「昔、平城の天子、侍臣に詔して、万葉集を撰ばしむ。爾より来、時は十代を歴、数は百年に過ぎたり。」仮名序（紀貫之）にも「かの御時より、この方、としはもゝとせあまり、世はとつぎになんなりにける」とある。平城の天子は、平城京に都した天子と取ることも出来るが、古今集が完成奏上された醍醐の御代から起算して、十代前は平城の御代である。また真名序の日付は延喜五年（九〇五）になっているが、それより百年前は平城天皇の大同元年（八六〇）である。一代前の桓武天皇とする説もあるが、桓武を平城の天子というわけにはいかぬ。また聖武天皇説、高野天皇（孝謙・称徳）説は、奈良朝の天皇の撰定と定めたものであろうが、すると「百年余り」が百三十年乃至百七、八十年ということになる。やはり百年は百年、世は十継というのは、平城天皇の御代と解すべきであらう。少くとも貫之等古今集の撰者たちが、万葉集を平城天皇の勅撰と信じていたことは確かであり、

奈良県桜井市の多武峰。もとは高市郡多武峰村であった。向って右端が多武峰東門、左端が西門にあたる（大和名所図会より）。

「うち手折り多武の山霧寒みかも。細川の瀬に、波の騒げる」（一七〇四番）。



その絶えた風を継ぎ、廃れた道を興そうと欲した醍醐天皇の意を承けて、四人の撰者たちは、「各、家の集並びに古来の旧歌を献って」いったんは統万葉集と名づけたのである。万葉集を継ぐつもりで、古今の歌を集めたのであった。

（家持は桓武天皇の延暦四年（七五五）に亡くなったが、彼は生前東宮大夫として、皇太子早良皇子に仕えていた。万葉集には大伴集とも言っている。幾つかの巻があるが、それは皇太子のための教材として、家持から皇子に献上されていたと想像できる。家持の死後一月ほどして、当時長岡京の造営主任であった藤原種継が暗殺され、家持はその謀主に擬せられて、死後にもかかわらず名簿は除かれ、皇太子は廃せられて、淡路へ流謫の途中、憤死するという事件があった。そのとき大伴家に伝えられた家集は没収されて宮中の歌舞所に収められ、それが以前から宮中に承伝された歌や古歌集と結びついて、万葉集が成立した、と前に折口信夫は考えていた。だがその考えを、後に彼は撤回した。〔そして早良皇子のとき献上されて東宮坊に残ったものが、事件後第二の太子安殿皇子の歌材となったものと想像している。その安殿太子が後の平城天皇であり、天皇に深く浸みついた「奈良魂」の出所は、そういうところから出ているように言っている。〕

家持から早良皇子に献上され、後に安殿皇子に帰した、大伴集ともいべき巻々は、まず家持の歌日記ともいべき形を見せている巻十七、十八、十九、二十。次に山上憶良によってまとめられ、家持の父族人に関係深いと見られる巻五。また古風・今様を交えて、家の集としてもっとも重々しい編集ぶりを見せて、大伴古今和歌集ともいべき巻三、四、六。その他に、整然とした四季雑歌、四季相聞

の形に編集されている巻八、十が考えられる。

平城天皇は父帝桓武が建てた平安京を棄てて、平城の旧京に復しようとして失敗した。奈良の生活を憧憬する詩人的情熱を持っていた天皇で、その血は皇孫である在原行平・業平等に伝わっている。万葉びとの生活への憧れを、天皇の胸中に想像するなら、大伴氏の数々の家集が手に入ったのをきっかけに、飛鳥・奈良時代の歌の集を勅撰しようとの考えは、自然に浮んで来たであろう。古今集の序、ことに真名序の中に、平城天皇に関して記されている言葉は、編者たちが万葉集の製作年代について、断案を下しているものと、折口信夫は見ているのである。

五

万葉集の歌全体は宮廷詩（大歌）であり、万葉という言葉は結局宮廷で行われた歌、すなわち大歌を意味した。もちろん万葉集の中には、巻十四の東歌をはじめ、地方の国ぶりの歌、すなわち作家不詳の民謡（小歌）も少からず収録されているが、民謡も宮中にはいって、歌舞所の歌舞の台本として用いられば、大歌である。あるいはまた、宮中に献ぜられたまま何等実際には用いられなかったとしても、歌舞所の所有に帰していれば大歌である。

万葉集の中で一番古い巻は、巻一、二である。しかもその二巻は、もともと整然と編纂されており、宮廷詩としてもっとも本格のものとしての形を見せている。ある時代に、ある編纂の目的を持って集めた歌であろう。巻一の最後が長皇子の歌であり、巻二の最後がその友の志貴皇子の薨ぜられたときの挽歌であることは、長皇子の編かと想像することも出来る。他の巻々は、これほど整然とした形を



柿本人麻呂像（三十六歌仙絵巻より）。

なしていないものが多いが、おそらくそれは、編纂の意図が中途で挫折した結果ではないかと思われる。

巻一は「雑歌」を集め、巻二は「相聞」と「挽歌」とを集めている。この三つが万葉の歌の、少くとも前期においては、分類の基本をなしている。それに、この三つの部立において、この二つの巻では、正確に年代順に排列しようとする意図を見せている。泊瀬朝倉宮（雄略）、高市岡本宮（舒明）、明日香川原宮（皇極）、後岡本宮（斉明）、近江大津宮（天智）と、宮の所在地によって時代を別ち、最後は寧楽宮（元明以降）に到る。ただし、寧楽宮はほんの初めを含んでいるに過ぎない。

巻一、二に収められた歌は、多くは端書を伴っているが、歴史的な、ある由緒を伴った歌なのである。それは雑歌・相聞・挽歌のすべてにわたって見える性質であるが、雑歌とは、相聞・挽歌に分類されない歌であって、同時にある由緒を伴った歌という意味が附随してくる。



万葉後期になると、たとえば巻十の、無名の四季雑歌のように、どういう時に作られたとも分らない、言わば由緒のない歌をも含むようになってくる。もつとも巻八の、作者の分っている四季雑歌は、それがどのような宴会のときに作られたか分っているものが多いから、そこでは雑歌が由緒ある歌であるという古来の意味は保たれている。だが、巻十六の本文に、「有_二由縁_一并雑歌」とあるのは、どう解したらよいのか。これは目録に、「有_二由縁_一雑詞」とあるのが正しく、後に雑歌を由緒ある歌と考えなくなったとき、筆記者が恣意に「并」の字を入れたのではないのか。つまり由緒ある歌すなわち雑歌なのである。

古今集では、万葉の四季雑歌は、巻一から六までの四季の歌となり、恋歌（巻十一から十五まで）とともに、もっとも大事な部立をなしている。外に、巻十七、十八に、雑歌上下があつて、多くは季語を含まない雑歌である。（中には季語を含んでいるものもある。）これら古今集の四季

上天智天皇が営んだ
大津京の跡（大津市南
滋賀町）。天皇崩御と
壬申の乱の後、大津京
は壊滅し、荒廃した。
「春草の茂く生ひた
る、霞立つ春日の大宮と
ころ、見れば悲しむ」
（柿本人麻呂・二九
番）。

「古の人にわれあれや、
涙の古き都を見れば
悲しも」 「高市黒人・
三二番」。

中唐崎（大津市下坂
本町）。

「涙の滋賀の大曲_{おはだ}淀む
とも、昔の人に復も逢
はめやも」 （人麻呂・
三一番）。

下石上神宮（奈良
県天理市）。

「石ノ上布留の神杉、
神さびて、吾やささら
ら恋に遭ひにける」 （一
九二七番）。

境内に、「未通女等之
袖振山乃水垣之久時從
憶寸吾者」 （人麻呂・
五〇一番）の歌碑も建
つてゐる。



の歌あるいは雑歌に、詞書を含んだ歌、つまり由緒ある歌を多く含んでいるが、外に「題しらず」とだけ詞書した歌も多い。これは元来由緒ある歌であったのが、その由緒を忘却してしまった歌なのか、もともと由緒を欠いていた歌なのか、どちらかであろう。もともと由緒を欠いていた歌とは、民謡（小歌）である。作者名のはっきりしている「題しらず」は前者であり、「読人しらず」で「題しらず」の歌なら、後者が多からう。

六

「相聞」とは、かけあい歌である。もともと恋歌という意味ではない。かけあい歌は男女が相對してかけ合わせるが多かったので、自然的、恋愛的气氛を伴うようになり、相聞といえは恋歌とされるようになった。だが相聞には、兄妹や親子その他が首信を交わし合う歌も多く、かつては相聞を「したしみうた」などと訓んだこともある。「相聞往来歌」ともいう。相聞は後になって、「正述心緒歌」と「寄物陳思歌」とに分れる。それは卷十一、十



二の、「古今相聞往来歌類」上下に見える分類である。外に「問答歌」「譬喻歌」「羈旅発思歌」「悲別歌」の部立があり、すべて相聞の歌の細分である。

正述心緒歌は、自分の感懐を外界の事象に託せずして直叙するもので、寄物陳思歌は外界の事象に託してなれば間接に自分の感懐を陳べるものである。外物に寄せるのであるから、季語を含むことも多く、四季相聞はすべて寄物陳思歌である。物に寄せることは、半分譬喻でもあることだが、完全な譬喻となると、譬喻歌となる。（ただし卷三では、雑歌・挽歌・相聞と並んで、譬喻歌の部立がある。）万葉集中、もともと文学意識の濃厚なものは、この譬喻歌であり、大陸の文学の影響に発しているものである。問答歌は、恋愛要素の稀薄な相聞の歌であり、もともとかけあいの歌で、二首ずつ並べてある。

羈旅発思歌と悲別歌とは、相聞往来歌の附録というべきだが、古今集になるとおのおの独立の部立となつて、羈旅歌（卷九）と離別歌（卷八）となつた。羈旅歌は卷三雑歌の中に、柿本人麻呂の八首（三九—三六）と高市黒人の八首

上 和歌山県の湯崎海岸。卷一の九番の題詞、一〇番の題詞などに見える「紀伊の温泉」は、この南紀の海に面した湯崎温泉であると言われる。謀反の罪を問われた有間皇子も、処刑される前、この温泉に拉致された。

中 巨勢（奈良県御所市古瀬）。藤原京から吉野離宮あるいは紀伊へ通じる、交通の要路であった。右が紀路、左が離宮路。

下 巨勢神社。後方に見えるのは巨勢山。「巨勢山」のつづら樺、つづら山に見つづる慰ふな。巨勢の春野を「坂門人足・五四番」。



(三〇—三七)とが並んでいるのが古い。折口信夫はこれらの騷旅歌を、旅先での鎮魂の歌として、静かな孤独の心境の叙景詩の発想を引き出したものとして、たいへん重視している。

七

挽歌とは、万葉集の前期にのみある名目である。すなわち、前期の宮廷詩は雑歌・相聞・挽歌の三つに分類されるのであるが、後期は雑歌・相聞の二つとなって、挽歌を作ることには非常に衰えてきた。そこではもはや、挽歌は哀傷歌の意味でしかなかったようだ。だが元来挽歌とは、必ずしも死者を悼む歌すなわち古今集の一つの部立となっている哀傷歌(卷十六)ということではなかった。

上古には貴人が死ぬと、一定期間その屍を殯宮(もくろうひんきやう)に移し、そこで遊離した魂をもう一度取りかえそうと、招魂(きようこん)の行事をやったのである。当時の人たちは、死んでいる者と、氣を失っている者との、はっきりした区別がつかず、魂を呼びもとしてもう一度身体に附著させると、ふたたび生きかえると信じていた。この生死の区別がつかない期間は、大体一年であった。この殯宮のとき、ど

ういうことが行われたかは、日本書紀に天武天皇の殯宮のときの行事をつぶさに書いているので想像がつく。発哭をたてまつることと、誄をたてまつることである。そして、このときに挽歌がたてまつられたろうということは、万葉集によって想像できるのである。

挽歌とは中国での意味は、死者の棺を挽くときにうたう歌ということだ。すなわち、葬儀にうたわれる哀歌だが、日本ではこの意味にきっちりとは当て嵌らない。日本の上代には、本葬の前に行われる殯宮の行事の期間にうたわれる歌を、主として指している。もちろん宮廷挽歌が盛んに作られた人麻呂等の時代に、人びとが死んでいるのか仮死状態なのか区別がなくて、殯宮行事をやったとは考えられない。だがその一昔前、生死がはっきり区別がつかなくて殯宮行事をやったことを、信仰的に伝承して、客観的には生死がはっきりしていても、信仰的には生死不明の期間と見做して、魂よばいの行事をやった。そのとき人麻呂等の修辭の妙と構想の莊嚴をつくした長大な挽歌は作られたのである。持統天皇以後、火葬が行われるようになって、殯宮行事は廃れ、従ってまたものしい形式の宮廷

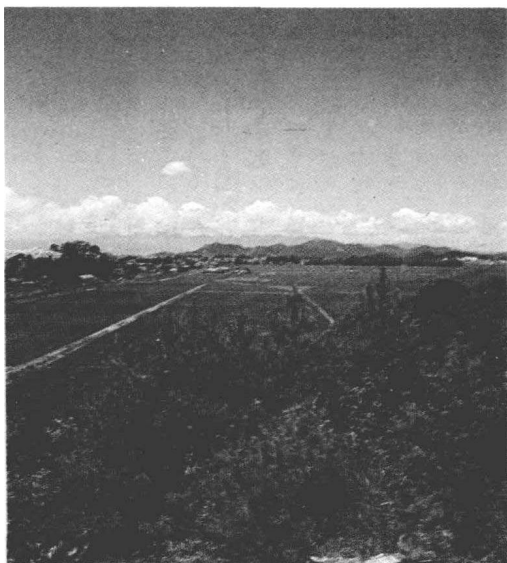


和歌山市の東南にある和歌浦。

「和歌ノ浦に潮満ち来れば、濁をなみ、蘆をさして、鶴鳴き渡る」(山部赤人・九一九番)

上 山部赤人。

下 大伴家持。
(三十六歌仙絵巻より)



挽歌も作られなくなった。

挽歌とはこのような、死者の魂をよび起そうとするための歌だから、当然死者に対して、こんなに恋い慕っているのだから戻って下さいといった発想になり、生者に対する相聞の歌と非常に似てくるのである。相聞に分類されている歌の中にも、実は挽歌ではないかと思われるものが、いくつもあるようだ。たとえば、磐姫皇后が天皇を偲ぶ相聞の歌は、発想の上から言えば、挽歌だと思われる。また有間皇子（四一、一四三）や柿本人麻呂（三三）の自傷歌は、死に臨んでみずから悲傷した歌だから、挽歌の普通の概念には当て嵌らないにもかかわらず、巻二の挽歌に分類されている。大津皇子の自傷歌（四六、中国流に言えば臨刑詩も、巻三の挽歌に分類されてある。また天智天皇への挽歌に

は、聖躬不^{じふ}予の時や御病急なる時の倭太后の歌も含めてある。まだ病気の時の歌で、殯宮以前の歌であり、元の健やかな魂を呼び戻そうとする鎮魂の歌なのである。

八

以上で巻一、二の雑歌・相聞・挽歌の名目について説いた。この巻一、二の歌は、第一期の大歌である記紀の歌を継いだものである。記紀の歌とは同時に作られながら、記紀に洩れたものを拾ったものもあろうし、その後には作られたものもある。何れにしても、ある由緒を伴った歌であることは、簡単に記された端書を見ても分る。それと同時に、記紀の歌が持っていた呪歌としての用途を、ここではまだ濃厚に保っている。後期の歌に顕著な、天子の万葉を祝する歌という意味には、はいりきらない歌がある。たとえば古い時代の大歌は、結婚のときにうたう歌としては、大国主命が高志の沼河姫をよばう時の歌を、天皇の大葬の時の歌としては、倭建命が伊勢の能煩野でなくなった時の后や御子たちの歌を、人が怒った時には、雄略天



天智天皇の御料地があった^{がうの}瀟生野（滋賀県八日市市附近）。
「あかねさす紫野ゆき、
標野ゆき、野守は見ず
や。君が袖ふる」（額
田王・二〇番）。

上 奈良の御蓋山。春日大社の後方にある。
「大君の三笠ノ山のも
みち葉は、今日の時雨
に、散りか過ぎなむ」
（大伴家持・二五五四
番）。

下 奈良市春日山の南にある高門山。奈良時代から、ここは貴族の遊樂の地であった。
「高田の野辺の秋萩、
いたづらに咲き散る
らむ。見る人なしに」
（二二一番）。



皇が三重采女を殺そうとした時の歌を、女が嫉妬した時には、大國主命から須勢理姫命に与えられた歌を、戦争の時は、神武天皇の時の久米歌を、狩狼の時は、同じく神武天皇の宇陀の高城の歌を、といったごとくである。その時に歌えばよい歌は大体において決っていて、それはすぐれた威力を持った歌とされ、繰り返し歌われた。

飛鳥時代には、その替え歌が盛んに作られるようになった。歌の文句は違っても歌の調子、曲譜が同じなら、同じ威力があると考えられた。それに新鮮な文句を盛れば、いっそう威力を増すと考えたのである。そのような替え歌が、記紀の大歌の中に現れはじめているし、万葉集の巻一、二の歌は、明かにそのような意識をもって新作したものの収録である。

巻一の冒頭は雄略天皇の歌であり、巻二の冒頭は磐姫皇后の歌である。記紀の伝えるところによって、雄略天皇は怒りやすく残忍だが、純真な気持を持った天皇とされ、磐姫皇后は激しく嫉妬するが、恋の心の深い皇后とされている。怒りも嫉妬も、それだけでは人の欠点とはならないし、ある場合にはそれが理想的な貴人、貴女の要件とさえ考えられたのである。

雑歌と相聞との初めに、この二人の貴い男女の歌が据えられているのは、やはり意味があるだろう。

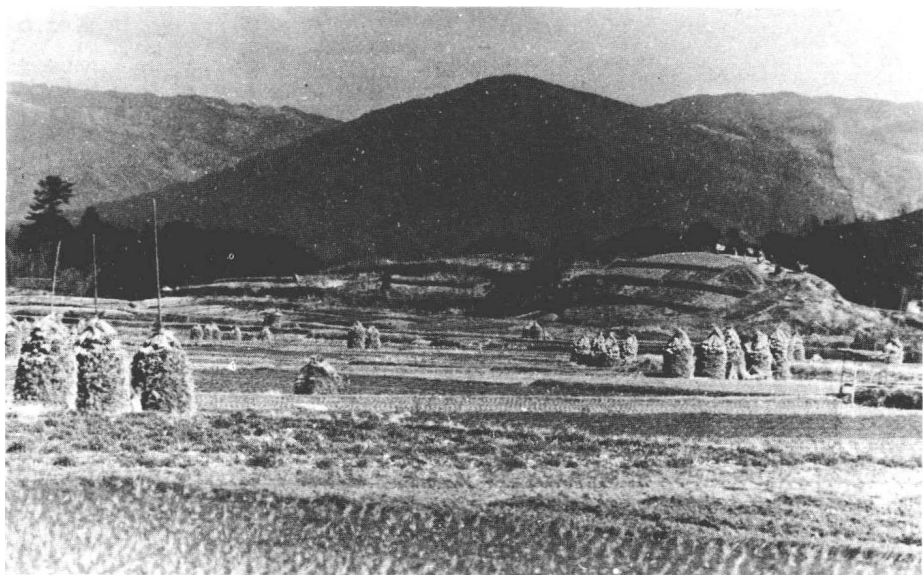


う。もちろんこれらの歌が、本当に天皇や皇后の歌であるかどうかは、問題でない。だが、この二人の貴人の作と伝承された歌であることが大事なのである。憤怒や憎悪や嫉妬すら、悪徳とは考えられなかった、すこぶる野性味を帯びた時代の貴人の作なのである。むしろ憤怒や嫉妬を十分に具備されていた点で、上古の人たちは理想的な人格と考えていたようだ。

威力を持った魂を持った人が、優れて貴い人なのであり、そういう人が作った歌は、当然威力あるものであった。歌の呪力は鎮魂にあり、それは古くは「たまふり」であり、後「たましづめ」となる。外からやって来て、身体に附著すると、威力の基となるのが「たま」である。その外

由比ヶ浜に注ぐ稲瀬川
(鎌倉市)。東歌に美奈能瀬河とあるのは、この川である。
「ま愛しみ、さ寝に吾は行く。鎌倉のみなせ川に潮満つなむか」
(三三六六番)。

稲村ヶ崎。
「鎌倉の見越ノ前の岩崩の、君が悔ゆべき心は持たじ」(三三六五番)と歌われた「見越ノ前」は、この稲村ヶ崎であろう。



来魂を密著させる術が「たまふり」であり、それが游離しないように抑えつけるのが「たましづめ」である。そして、「たま」を密著させたり、抑えつけたりする術をやる時に、唱える詞章が「うた」なのである。巻一、この冒頭に置かれた雄略天皇や磐姫皇后の歌は、そのような鎮魂の詞章として、ことに威力ありと認められたものであった。

「うた」の外に「ふり」と称えられているものがある。記紀の歌では、振・曲などと書いているが、「うた」と「ふり」とには本質的な区別はないようだ。宮廷に長く伝えられたものが「うた」で、民間から奉るものが「ふり」だったが、後には民間から奉っても宮廷にはいれば「うた」であり、臨時に新しく民間から奉るものを「ふり」と言うようになった。「ふり」とは、魂を身体につける「うた」、すなわち「魂融り歌」ということである。

その一種に「くにぶりの歌がある。「くに」とは、宮廷の所在地から遠く離れた地方を指し、宮廷直属の「あがた」に対する。そのような地方の豪族たちが、服従のしるしに、天皇に自分の威力の基である魂を差し上げて固著させようとする、そのための歌が、「くにぶりの歌なのである。巻十四の東歌のごときも、そのような「くにぶりの歌の最後の形として、東国から宮廷に献上されるきまりになっていた歌の集録である。それには声楽と舞踊とが附随



奈良県明日香村にある雷丘。高さ一〇メートルほどの小さな丘である。
「大君は神にしませば、天雲の雷が上に庵らせるかも」（八麻呂・二二五番）。

三輪山。奈良県桜井市三輪にある。山ぜんたいが神体とされ、三輪山伝説でよく知られている。
三輪山をしかも隠すか。雲だにも心あらなむ。かくさふべしや」（額田王・一八番）は、都が近江にうつされた時、故京を出てゆく額田王が三輪山への郷愁を歌ったもの。